

(別紙1)

総括研究報告書

課題番号：2020B-19

課題名：成育医療分野における研究教育・人材育成のための基盤構築プロジェクト

主任研究者 (所属施設) 国立成育医療研究センター
(所属・職名 氏名) 教育研修センター・センター長 石黒 精

(研究成果の要約) 本研究の目的は、成育医療分野における研究を加速する基盤となるために、病院、研究所、臨床研究センターが密接に連携し、体系的な研究教育と分野横断的な研究能力を有する人材を育成する体制の整備である。本年度は、2020年度研究事業計画にもとづき、研究実施体制を立ち上げ、人材育成基盤および研究教育基盤の整備を行った。具体的には、医療従事者のオンザジョブトレーニングとしての研究実施に関するシラバスの作成と周知、リサーチコンシェルジュ体制の再構築、病院・研究所間の人材交流を実施した。これらの取り組みに加えて、研究協力・支援、論文出版費用補助等を行うことにより、49件の学術論文の出版に貢献した。また、研究の計画・実施にあたり必須となる研究倫理等に関する研修会・セミナーを計10件企画・開催し、さらにその他計14件の研修会・セミナーについて開催支援を行った。新型コロナウイルス感染症流行に伴い、研修会・セミナー等については延期や開催方法の変更が必要となったが、この点を除き、研究事業全体としては順調に進捗した。

1. 研究目的

本研究の目的は、成育医療分野における研究を加速する基盤となるために、病院、研究所、臨床研究センターが密接に連携し、体系的な研究教育と分野横断的な研究能力を有する人材を育成する体制の整備である。

本研究期間内に整備された体制は、研究期間の終了後も最適化された形で運用され、当センターにおいて長期にわたる研究教育・人材育成に貢献することを目指す。

2. 研究組織

研究者	所属施設
石黒 精	国立成育医療研究センター
深見真紀	国立成育医療研究センター
高田修治	国立成育医療研究センター
竹原健二	国立成育医療研究センター
余谷暢之	国立成育医療研究センター
永田知映	国立成育医療研究センター
野村 理	国立成育医療研究センター

3. 研究成果

2020年度研究事業計画にもとづき、下記の通り研究を実施した。新型コロナウイルス感染症流行に伴い、研修会等については延期や開催方法の変更が必要となったが、この点を除き、研究事業全体としては順調

に進捗した。

1) 研究実施体制の整備

本研究班の研究代表者、研究分担者をメンバーとする研究教育・人材育成ワーキンググループを立ち上げ、本研究計画についてセンター幹部へ説明を行った。研究教育・人材育成等について情報を収集するとともに、各ステークホルダーに研究推進を目的とした病院・研究所間の交流をさらに活発化するように協力依頼した。

2) 人材育成推進基盤

イ) オンザジョブトレーニング

当センター職員の研究に関する相談窓口として、研究所のリサーチコンシェルジュ、臨床研究センターの臨床研究相談・支援窓口が既設である。このうち休眠状態になっていたリサーチコンシェルジュについて、本研究により体制の再構築を行った(別添資料1:ポスター)。分担研究者の高田が代表窓口となり、分子内分泌研究部の鳴海室長(実験医学担当)、社会医学研究部の加藤室長(社会医学担当)、共同研究管理室の田所室長(機器担当)の協力を得て新体制を構築し、病院職員への周知・広報を行った。また、研究所の各研究部に協力を依頼し、医療

従事者のオンザジョブトレーニングとしての研究実施に関するシラバス作成を行い、病院職員に対して情報提供を行った（別添資料2：シラバス）。このような取り組みを通して、下記4名の医療従事者が研究所の研究部で研究を実施した。

・布施田泰之医師（小児科専攻医）：専攻医プログラムの一環として選択期間を活用し、システム発生・再生医学研究部において機械学習、グラム染色自動認識に関する研究を実施した。

・今井健太医師（小児科専攻医）：専攻医プログラムの一環として選択期間を活用し、社会医学研究部においてCOVID-19による母子の心理変化に関する研究、児童の生活と肥満に関する研究を実施した（成果を日見誌に投稿中）。

・石川尊士医師（免疫科専門修練医）：網羅的病原体ゲノム解析による感染症の早期診断法に関する研究を実施した。

・岡井真史医師（免疫科専門修練医）：網羅的病原体ゲノム解析による感染症の早期診断法に関する研究を実施した。

ロ) 研究協力・支援

若手医療従事者、研究者に対して、研究の計画・実施、学術論文の執筆にかかる指導・支援を行い、研究成果の刊行に関する総括表（別紙3）に記載されている49の学術論文の出版に貢献した。

また研究協力・支援に加えて、医学教育に関する研究を実施した。当該研究により、小児科卒後研修生の認定試験成績の予測因子として、研究発表や論文発表などの学術的活動が正の予測因子であることが分かった。

ハ) 人材交流

病院の医療従事者が研究に触れる機会および研究所の研究者が病院での診療に触れる機会となる病院・研究所間の人材交流として、定期的なカンファランスへのリモート参加など、10件の人材交流が実施された。また、近年医学部への医科学修士の併設が

増加し、医師が non-MD の学生の研究や就職指導を行う機会が増えつつあることから、「non-MD のキャリアパスを考える」と題した講演会を企画・実施した。

ニ) 人材育成費用補助・論文出版費用補助の実施

論文出版費用補助として、英語論文校正費（17件）を支出し、当センターより出版される英文学術論文の質の担保に貢献した。

3) 研究教育推進基盤

イ) 研究コンプライアンス等、研究教育の実施

研究に関する法令や指針をはじめ、研究の計画・実施にあたり必須となる各種研修会等を計10件企画・開催した。内訳は下記の通りである。

- ・臨床倫理や研究倫理に関する研修会：3件
- ・臨床研究や学会発表・論文執筆の基本、出版倫理に関するセミナー：5件
- ・Medical writingに関するセミナー：1件
- ・Non-MD キャリアパスに関する講演：1件

ロ) 研修会の登録・調整および開催支援

新型コロナウイルス感染症流行により、研修会等のウェビナー形式やハイブリッド形式での開催の必要性が高まった。これに伴い本研究班でも、ウェビナー形式での開催にかかる諸準備についてノウハウを蓄積し、手順の整理を行った。このような経験が乏しい部門への支援もかねて、14件の研修会等について開催支援を実施し、当センターにおける研修会等の開催にかかる基盤として機能した。

4. 研究内容の倫理面への配慮

本研究の目的は、体系的な研究教育と分野横断的な研究能力を有する人材の育成を行う体制の整備であり、特段の倫理面への配慮を要しない。ただし、本研究の教育プログラム内で計画・実施される個々の研究に関しては、研究の目的と内容に応じて、該当する法律や指針等に基づいて研究計画を立案し、適切な委員会での承認を得た後に、実施された。